

2022年5月8日（日）主日朝礼拝説教

『婦人よ、なぜ泣いているのか』井上隆晶牧師
出エジプト記19章10～13節、ヨハネ福音書20章11～18節

①【二人の天使】

イエス様が復活した日曜日の朝早く、マグダラのマリアが墓に行くとき既に墓石が取りのけてありました。そこで彼女はペトロとヨハネの元に走って行って「**主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、私たちには分かりません。**」と告げます。二人の弟子は墓に走ってゆき、墓の中で遺体を包んでいた亜麻布が丸めてあるのを見ますが、その意味が分からずに家に帰っていきます。しかしマリアは帰らずにまだ墓の外で泣いていました。泣きながら墓の中をのぞくと、白い衣を着た二人の天使を見ました。「**イエスの遺体の置いてあった所に、…一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。**」（20：12）とあります。天使が人間に現れる時というのは、神の言葉や業を伝える時です。ここでもそうです。人間による盗難があったのではなく、神の業がそこで行われたということを教えようとしているのです。一人は頭、一人は足の方に座っていたということはどういう意味でしょう。4世紀のローマのグレゴリオスは、二人の天使は至聖所にあった「契約の箱」の一对のケルビムのようにであり、旧約と新約という二つの契約を意味していて、それがキリストによって結ばれたのだ、と解釈しました。面白いと思います。私はキリストは天使に担がれている存在（神的存在）であることを教えようとしているように感じます。

②【婦人よ、なぜ泣いているのか】

墓の中の天使はマリアに「婦人よ、なぜ泣いているのか。」というと、マリアは「**わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。**」と答えます。こう言いながら後ろを振り向くと、イエス様が彼女の後ろに立っているのが見えたが、彼女はイエス様だとは分からず、園丁（庭師・ガーディナー）だと思いました。イエス様はマリアに「婦人よ、なぜ泣いているのか。誰を捜しているのか。」と問うと、マリアは「**あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えて下さい。わたしが、あの方を引き取ります。**」と答えます。墓の中と外から、マリアの前と後ろから「**なぜ泣いているのか**」という言葉が、まるでアンティフォン（交唱）のように響きます。下を向くマリアに何とかして顔を上げさせようとしているようです。讚美歌を歌うと心が明るくなるのは、神の言葉を繰り返し歌うことによって、耳に入って来るからでしょう。

この13節と15節のマリアの返事には「わたし」という言葉が3回も出てきます。「わたしの主」「わたしが、あの方を引き取ります」という言葉は、イエス様に対する彼女の個人的な思いをととても強く感じます。母親でも妻でもないのに「わた

しの主」と言っています。また男弟子たちが墓を去っても去ろうとしないのは墓に対するものすごい執着を感じます。それには理由があります。このマグダラのマリアという女性は、以前七つの悪霊に支配されて生きていました。悪霊に支配されていたということは、神でもないものにしがみついて生きていたということです。まるで七つの依存症があったようなものです。それをイエス様が癒してくれました。彼女の人生はイエス様によって180度変わり、今度はイエス様が生きがいのようになっていたのです。ところがそのイエス様が死んでしまいました。イエス様の死によって自分の一生も終わったと思ったかもしれません。マリアは尼僧(シスター)になってイエス様の遺体を守り、遺体に仕えて一生を過ごそうと思ったのかもしれません。「婦人よ、なぜ泣いているのか。誰を捜しているのか」というイエス様の問いかけは、マリアの信仰に疑問を投げかける言葉です。マリアは墓に向かつて泣いていますが、それはイエス様を私たち人間と同じ者と考えて死人の中に捜しているからです。マリアはイエス様の遺体を見失っていますが、実はイエス様が誰であるかを見失っているのです。キリストは神です。神だから復活したのです。神は死なないからです。

●教父たちは「キリストを見て真似られるところは真似なさい。真似られないところは礼拝なさい」といいました。キリストを完全な神として礼拝し、同時に完全な人間として真似なければなりません。神キリストは近づくことも触れることも出来ませんが、人間イエスは親しく触れることができます。このバランス感覚が大切です。バランスを欠いた信仰は、いくら熱心でも必ず歪んでいきます。それは教会も同じです。教会はキリストの体ですから、キリストの神性の部分と人間性の部分の両方をもっています。今の教会には「聖・神秘」という領域がなくなりました。「聖」とは神の性質であり、人間が覗くことのできない部分です。信仰には人間の力を超えた部分があります。これ以上は神様に委ねるしかないという部分があるのです。キリストが神であるということは聖なる領域です。マリアの個人的な情愛を超えたものです。マリアも、距離を取って近づかなければなりません。

③【名前を呼ばれると】

イエス様が「マリア」と呼びかけられると、彼女はその懐かしい声を思い出し、すぐに振り向き、ヘブライ語で「ラボニ」(先生という意味)と言いました。(20:16)「婦人よ」と言われても気づかなかったのに「マリア」と言われて彼女は気づきました。自分を知っている人でなければ「名前」を呼ばません。名前を呼ばれるという事はキリストに知られているということなのです。イエス様はザアカイを知り、ナタナエルを知り、マリアを知り、そして私も知っておられます。大勢の中の一人ではなく、かけがえのない一人、世界にたった一人、歴史上でたった一人だけの自分、それが私であり「私の名前」なのです。そのたった一人の私を主は知り、愛し、大切にしてくださいませ。

●渡辺和子シスターがこんなことを書いています。「人間の可能性は、他と比較でき

ない独自の価値において愛されることによって引き出される。善き牧者が、自分の羊をおのおの名を呼んで引き出す時、そのまなざしは、ユニークな一匹ずつへの愛に溢れていたに違いない。名前前で呼ぶということは、番号で呼ばないという事である。それは他の誰にもならないのですよ。あなたにしか送れないあなたの人生に、自分しかつけられない足跡をつけておきなさい、ということでもある。かくて、名前を呼ばれることによって、その人は他と比較できないユニークな存在としての自分の価値にめざめてゆくのである。」

マグダラのマリアという一人の女性をイエス様は大切にしてくださいました。それにより彼女は自立し、強くなっていったのだと思います。

④【私中心の信仰からキリスト中心の信仰へ成長しなさい】

この後マリアは自分の後ろに立っているイエス様にすがりつこうとしたのでしよう。でもイエス様は「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ、父のもとへ上っていないのだから。」(20:17)と言ってマリアを拒絶しました。全ての人に「すがりつくな」と言われたわけではありません。「婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き」(マタイ 28:9)とあるように、ある婦人たちはイエス様の足を抱いていますし、トマスには「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。」(ヨハネ 20:27)とされているからです。「私にすがりつくな」とマリアに言われたのは、自分の抱いているキリストのイメージや、自分の抱いている救いのイメージにすがりつくなと言われたのです。「まだ、父のもとへ上っていないのだから」とは昇天を意味しています。昇天によってキリストが神であることを正しく知ってから、しがみつけと言われたのです。

●先日、高齢者施設にいる平方美代子牧師を訪問しました。先生は車いすに座って、御自分の書かれた説教集を読んでおられ、テーブルには聖書が置いてありました。今年で95歳になりますが、施設から外に出れなくても、聖書を読み、信仰がなくならないように、しっかり守っておられる姿に感動しました。私に「この説教はあかな。別のを出すわ」とおっしゃっておられました。死ぬまで成長しようとする姿に励まされました。

朝の祈りの時に、礼拝堂のイコン(聖画)やさまざまな聖器物を見ながら、「ああ、これもあの時買ったな」と思うことがあります。私たちが過去の思い出を懐かしむのは悪くありませんが、それにすがりついて生きてはいけないと思います。地上の一切のものは、聖堂も含めて天国へのエレベーターのようなものです。私たちはエレベーターの中に永遠に住むではありません。私は戸口で待っていてくださる方のことを思っているのです。キリストは私の人生の過去に共にいて下さいましたが、現在も共におられ、未来にも共にいてくださいます。そのキリストの後を従わなければなりません。彼が永遠の命だからです。命は前にあるのです。過去は、現在につながり、現在は未来につながっています。私たちが今、礼拝し修道生活を送っているのは未来の為です。パウロが言うように何とかして永遠の命を得ようと努めているからです。「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、

前のものに全身を向けつつ、…目標を目指してひたすら走ることです。」(フィリ
ピ 3:13) この後、マグダラのマリアは、弟子たちのところへ行って「わたしは
主を見ました」と告げ、主から言われたことを伝えました。マリアはキリストの
道具となり、未来に命を伝えてゆくキリストの僕となったのです。私たちもキリ
ストの命に与りながら成長し、キリストの命を運んでゆく者になりましょう。